秋田県の話題

我がふるさと紹介
高さ日本一の能代七夕
今年は8月2日から7日まで

今野和雄

今年の能代七夕は、8月2日アニメや漫画のキャラクターをかたどった数十基の灯籠が練り歩く「こども七夕」を皮切りに能代七夕が幕を開ける。3日と4日には、高さ日本一の城郭灯籠「天空の不夜城」愛季（ちかすえ）と嘉六（かろく）が練り歩く。

能代には「役七夕」と呼ばれる夏の伝統行事がある。田楽、笛、太鼓の囃子を伴い、若衆によって引き回される灯籠は、かって5丈8尺（約17・8m）もあったという。しかし明治に入り電気が普及、電線の制約を受けるようになったため小型化、約7～8mの高さとなる。

昔の大型灯籠を蘇らせようと平成25年に5丈8尺の灯籠、嘉六が復活。翌26年には高さ24・1m、日本一の高さを誇る「天空の不夜城」愛季が誕生した。

嘉六(左)と愛季(右)

名称の「嘉六」は、名古屋城を模した灯籠を最初に制作したと伝えられる天保年間の大工・宮腰屋嘉六にちなんだものである。また、「愛季」は、灯籠の絵柄が戦国時代の檜山城城主安東愛季にまつわるエピソードで構成されていることからその名をとった。

「愛季」は今年1月、東京ドームで開催された「ふるさと祭り東京2016」に出演し好評を博し、今夏の運行に更に弾みがついたものと思う。

伝統の「役七夕」は8月6日7日に運行され、「こども七夕」からの約1週間が「七夕ウィーク」である。

夕暮れとともに灯りがともされた灯籠。流麗な「道中ばやし」が響き、若衆の威勢の良いかけ声と共に、街を練り歩く光景は、壮観である。

「役七夕」の最終日7日には、米代川河口で「シャチ流し」が行われる。各灯籠上部の鯱をいかだに載せて点火し、勇壮に練り歩く時とは違い、物静かに流れる「流し囃子」の中、立ち上る炎が水面を照らし、フィナーレを迎える。

秋田市の竿灯まつり、大曲市の花火大会などメジャーな夏の風物詩もあるが、能代市の七夕まつりもなかなかのもんだよ。一度見に行ったらどうだべか。■

シャチ流し

80周年を迎える五能線

JR五能線「リゾートしらかみ」は、毎年春から秋にかけて賑わいを見せているが、旅行会社のアンケートで「乗ってみたいローカル線」1位に選ばれた人気に衰えはない。

五能線は、今年7月で全線開通80周年。JRが沿線地域による観光路線化への取り組みが始まったのは平成に入ってからで、その時点では存続すら危ぶまれていた。

運行本数の削減やワンマン運転など合理化の後、景観を生かした観光列車を運行。「リゾートしらかみ」は、JR東日本の観光列車で最多の年間10万人超が乗車している。

運転士が自主的に行っていた絶景ポイントでの徐行をダイヤに反映。飲食メニューの開発や沿線ガイドブック作成など、地域を連携したサービスも好評だ。

赤字ローカル線から人気ナンバーワンとなった物語は、人口減に悩む秋田県の活性化策に通じる。

節目の年に広く知られるようになれば、各地で議論されている地方再生の参考にもなるだろう。

（秋田魁新聞コラム欄から転載）■

リゾートしらかみ

男鹿半島の誕生とナマハゲ

日本海に突き出た男鹿半島は、かって島だった。約2千年前、米代川と雄物川の砂州により陸続きになった。

半島の付け根には日本で2番目に大きな湖であった八郎潟ができたが、コメ増産のため干拓され、50年目の1964年に大潟村が誕生した。

鎌倉時代以降、「オガ」は「小鹿」や「牡鹿」など様々な字が当てられ、「男鹿」と記されるようになったのは江戸時代中期以降とみられている。

「男鹿」といえば、大みそかの風物詩のナマハゲをすぐ思い出すが、かっては小正月（1月15日）の行事だったようだ。

現代のナマハゲは「うおーっ、うおーっ」と叫びながら家々を巡るが、当時は「あ」と一言だけ発して現れたとか。（「ナマハゲ」については本会報の第6号に佐藤昭彦会長の記事もありますのでご覧になって下さい。）

石焼鍋も人気

男鹿の秋はハタハタの底引き網漁が解禁になり、タラ・ノドグロ・アンコウなどが美味しい季節です。また石焼料理も有名です。

夕日の名所としても知られ、日本海が一望できる入道崎からの夕景は何度見ても感動するとか。“おもてなし”の心が行き渡ったこの地に足を運んでみませんか。

（読売新聞から転載部分あり）■